

JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORUM

No. 13 (Supplement) March 2020

ラグビーフォーラム

令和2年3月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

一般発表(口頭)抄録

社会人ラグビーチームと大学ラグビーチームの“相互インターンシップ”による コーチング能力開発に関する一考察	伊藤鐘史 (京都産業大学)
「ラグビー」を戒名にした男 —杉本貞一の関西ラグビー界への貢献—	高木應光 (神戸居留地研究会)
「ワンチーム」とは何か —言語イメージから定義づけへの試み—	高田正義 (愛知学院大学)
ラグビーの時間帯別の得点についての分析 —関西大学ラグビーリーグを対象として—	青木敦英 (芦屋大学)
女子大学生のラグビーフットボールに関する意識調査 —ラグビーワールドカップ 2019 日本大会がもたらしたもの—	寺田泰人 (桜花学園大学)
ラグビーフットボール選手の身体組成と臨床検査値に関する研究	東出珠美 (京都女子大学)

「社会人ラグビーチームと大学ラグビーチームの“相互インターンシップ”による コーチング能力開発に関する一考察」

伊藤 鐘史（京都産業大学）

キーワード：ラグビー，コーチング，インターンシップ，ナレッジマネジメント

【目的】

本稿の目的は、ラグビー強豪国であるニュージーランド（以下、NZ）のコーチングの体制を概観した上で、日本の社会人チームと大学チームへの“相互インターンシップ”を提案し、その有効性を検討することである。

ラグビーワールドカップ2019日本大会での日本代表チームの決勝トーナメント進出に日本中の注目が集まった。今後、日本がワールドカップにおいて優勝するため、選手の育成・強化はもちろん、コーチング、レフリング、マネジメント等、あらゆる領域において更なる発展を目指さなければならない。

本稿では、コーチングを発展させる観点から“相互インターンシップ”を提案する。

“相互インターンシップ”とは、社会人チームと大学チームによる相互人材派遣であり、カテゴリーを縦断するナレッジマネジメントとして有効性が高いと考えられる。

【方法】

NZラグビーにおけるコーチングに関する文献を調査し、NZ代表チームに好影響を与えている要因を調査する。

次に日本ラグビーにおけるコーチングの体制について現状を把握し、より発展させるために相互インターンシップを提案する。

NZのコーチングの体制と相互インターンシップを比較し、類似点を探求することにより相互インター

ンシップの有効性を検討する。

【結果及び考察】

NZラグビーにおけるコーチングの体制と相互インターンシップは、カテゴリーを超えたコーチ間の知識の共有が行われるという類似点があるため、相互インターンシップは、日本ラグビーのコーチングを発展させる有効性が高いと期待できる。

「我々の強さはコーチングにある。小さい国だから指導者同士が考え方を緊密に共有している」（キャメロン・グッド 日本経済新聞 2017.11.15）と論じているように、NZでは各カテゴリーを縦断するナレッジマネジメントが成され、NZ代表チームの強化に一定の影響を与えている。

本稿で提案した相互インターンシップは、大学チームから社会人チームへ学生選手を派遣し、練習に参加することで選手の育成・強化を図る。

一方、社会人チームから大学チームへはベテラン選手を派遣し、コーチとして現場でのコーチングを経験する。ベテラン選手にとってはセカンドキャリアへ向けた準備に繋がり、大学チーム側のコーチにとっては年々進化するコーチングについての知識を得ることが出来る。

相互インターンシップはカテゴリーを縦断するナレッジマネジメントとして機能することから日本ラグビーにおけるコーチングをより発展させると主張できる。

「ラグビー」を戒名にした男 ～杉本貞一の関西ラグビー界への貢献～

○高木應光（神戸居留地研究会） 星野繁一（龍谷大学） 西村克美（嵯峨野高校）

キーワード：現高校全国大会「生みの親」、西部協会の設立、戒名はラグビー、孫の名は「エリス」

1. 目的

自らの戒名を「ラグビー」と命名したラグーマンがいた。彼の名は杉本貞一、大阪出身の慶應ラグビー部初期の人物である。

彼は、高校生の聖地・花園ラグビー全国大会の「生みの親」でもあり、その後、関西ラグビー協会の初代会長も務めた。

本稿の目的は、関西ラグビー界に多大な貢献をした杉本貞一。彼のラグビーに関わる事績やラグビー界への貢献、さらにはラグビーを通じて感得した人生観等を探り、我々への示唆を見出すことである。

2. 調査方法

先行研究は見当たらない。主として文献をその対象とし、遺族等にも聴き取りをした。以下に主な文献を列挙する。『関西ラグビーフットボール協会史』『日本ラグビー史』『慶應蹴球部 60 年史』『三高蹴球部史』『関西ラグビー倶楽部 20 年史』等。その他については、引用・参考文献としてその都度提示する。

3. 考察

杉本の父・杉松が熱海温泉に旅したとき、慶應の福沢諭吉と出会い、息子・貞一の進学を勧められた。これが、慶應との運命の出会いだった。

明治後期、杉本は慶應普通部（中学）に入学、ラグビー部にも所属する。時に慶應は中学にもラグビー部を設け、長期計画で選手を育てようとしていた。それが功を奏し、杉本は中学生ながら大学生に混ざってプレーした。

京都に誕生した関西初・国内 2 番目のラグビー部は、第三高等学校である。杉本はその黎明期、およそ 1 ヶ月コーチを務めている。そして慶應では、大正 2 年度の主将を務めた。

卒業後は、帰阪し家業の機械工具・卸商を手伝う傍ら、ラグビー普及のため多くの学校へ出向きコーチした。関西で彼の世話にならなかったラグビー部は、無いと言われるほどだった。

大正半ば、大阪・豊中から始まった現、花園・高校ラグビー全国大会（元、日本フットボール大会）。杉本は、この大会を企画提案し大阪毎日新聞社に主催させた。言わば「生みの親」である。また、自ら委員やレフリーも務めている。

同時期、杉本は同志を語らい初の社会人クラブ「オールホワイト」(関西ラグビー倶楽部)を結成、より高いレベルのラグビーを楽しむと共にその普及を目指した。この倶楽部に刺激を受け、関東で組織されたのが All Japan Rugby Club で、関西倶楽部と切磋琢磨した。

やがて大正の末期、この AJRC が土台となって関東ラグビー協会が創設され、西では関西倶楽部が中心となって西部ラグビー蹴球協会（後、関西ラグビーフットボール協会）が設立される。杉本は組織を切り回すべく初代理事長に就き、やがて昭和初期には会長に就任、組織の充実を図り敗戦後の 1946（昭和 21）年まで会長を務めた。

大正末年、杉本の進言もあって東・西が、協議し日本ラグビー蹴球協会が誕生する。「大大阪」を背景に、事務所が一時期、大阪西区新町に置かれたことを知る人は少ない。

戦後の学制改革に伴い旧制高校が亡くなることを、杉本は病床で聞く。三高の黎明期に乳母役を果たした杉本。母校・慶應と同じく慈愛ある三高へ「決別の辞」を認め、三男・善三郎に持たせた。

その後、杉本は 5 年余を肺病との闘いに費やし、64 歳で生涯を閉じた。生前、自らの戒名を「ラグビー」とすることを、家族に厳命していたという。

まとめ

杉本が自らの戒名を「楽美院釋 蹴球居士」と命名したのは、自身の人生がラグビー一筋であったことを示す証だった。

尚、三男・善三郎の娘の名は、英里子である。

「ワンチーム」とは何か

- 言語イメージから定義づけへの試み -

○高田正義 (愛知学院大学)、岡本昌也 (愛知工業大学)、早坂一成 (名古屋学院大学)、
寺田泰人 (桜花学園大学)、小柳竜太 (愛知学院大学)、杉原叡土 (愛知学院大学)

キーワード：ラグビー、ワンチーム、集団凝集性、集団効力感

【目的】

集団が一つに結集し、共通の課題に挑むことで大きな業績を達成することは少なくないだろう。集団の凝集性と生産性との関係は、多くの研究で密接であるとされている。スポーツ集団研究においては、集団凝集性 (group cohesiveness)、集団効力感 (collective efficacy) などの報告がなされている。

2019 年を象徴する言葉「ワンチーム」。ラグビーワールドカップで躍進した日本代表を支えた言葉として、今や国内に急速に浸透しつつある。流行語大賞にもなった「ワンチーム」であるが大衆化された為、その内容は多岐に解釈され実態が掴めないまま言葉だけが流布している感がある。

そこで本研究は、今回話題となっている「ワンチーム」という言葉に関して定義づけを試みることを目的とした。

【手続き】

1. 調査内容

インターネット等により「ワンチーム」に関する記事を収集した。

2. 分析

1) 記事に書かれている内容において「ワンチーム」を説明していると考えられる単語を抽出した。

2) 抽出された単語データと記事に書かれている文脈による逐語分析を行い、抽出された単語を KJ 法によってグループ化を行った。

3) グループ化されたものに、それぞれ概念的命名を行い、グループごとの関連性が近いものを「ワンチーム」の構成要因として取り上げた。

【結果と考察】

本研究において、概念化しようとしている「ワンチーム」という言葉は、大きく分けて以下の3要因

によって構成されていると考えられる。

1. 組織結束要因

組織を強固に結びつける要因として考えられる。構成概念は「多様性」「一体感」「協力」「自己犠牲」とした。

2. 組織関係要因

組織内の人間関係に関わる要因として考えられる。構成概念は「信頼関係」「プロ意識」「使命感」「尊敬関係」とした。

3. 組織構築要因

組織を構築するために必要とする要因として考えられる。構成概念は「チーム文化」とした。

表1. 「ワンチーム」とは何か (記載例)

	内 容	語(著)者	出 典
1	言葉を使えばワンチームになれるわけではない、どういふふうにワンチームにするかが大事。中身をしっかりと考えて使って欲しい。	梶江剛次	https://www.sanspo.com
2	4年間かけて、チームという文化を作り上げてきたわけです。その文化がワンチームなんです。	種田啓次	https://news.yahoo.co.jp
3	ワンチームの要諦は、チーム文化、普段の鍛錬にあることだろう。	松原 亨	https://news.yahoo.co.jp
4	「ワンチーム」は、まず「他者への気遣い」を前提として組織を一体化させるために機能する言葉です。	立川隆慶	https://ansend.jp
5	さまざまなルーツを持った人々が、互いに認め合い、互いに助け合うための自己犠牲の美しさを意味する。	石野シヤラン	https://www.newsweek.jp/
6	それぞれがプロに徹し、決して「仲良くしよう」とはしない。一定の距離感を持ち、時に「キスギス」した感じもあった。近すぎる関係は良くない。選手、コーチ、メデカル、マネージャー、通訳などが対等な関係だったと感じている。それぞれの部門の「プロ」が体音と本音でぶつかり合い合った「ワンチーム」でした。	高森卓平	https://www.1ink.jp
7	決して「同質性」のことではないし、ましてや「同調圧力」に加担する言葉でもない。選手やスタッフたちが、国籍や民族、出身国の違いを超えて、一つの目的のためにまとまること。	藤島 大	ラグビーマガジン
8	多様性を認め合った上で、一つの信念の下でのワンチームである。	長澤祥哉	https://note.com

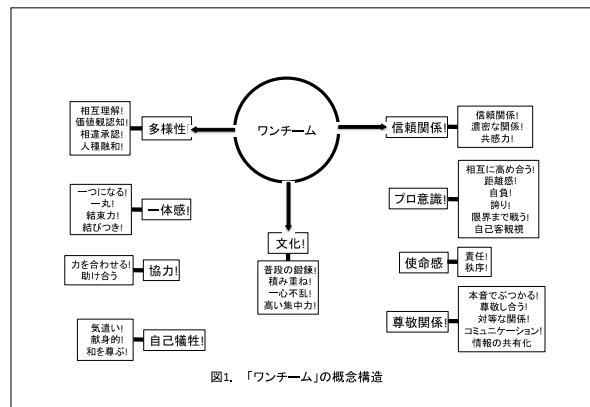


図1. 「ワンチーム」の概念構造

ラグビーの時間帯別の得点についての分析
- 関西大学ラグビーリーグを対象として -

○青木敦英 (芦屋大学) 石指宏通 (奈良県立医科大学) 入江直樹 (滋賀大学)
千葉英史 (追手門学院大学) 灘英世 (関西大学)

キーワード：関西大学ラグビーリーグ、時間帯別得点、競技レベル

【目的】

ラグビー競技は決められた試合時間内でより多くの得点を決めたチームが勝利する球技である。その試合時間は大学生以上では前後半40分ハーフ、合計80分間と長時間にわたる。これまでにラグビー競技において得点する時間帯が勝敗とどのように関係するのかについては世界レベルと国内大学トップチームを対象とした報告 (中川ほか, 2005) しか見当たらない。本研究では関西大学ラグビーリーグを対象に、時間帯別による得点傾向について調査し、勝敗との関係、競技レベルでの比較を試みた。

【方法】

1. 対象

2018年関西大学ラグビーリーグの公式戦、Aリーグ全試合 (28試合) とBリーグ全試合 (43試合) を対象とした。なお本研究における資料収集は関西ラグビーフットボール協会に送信された試合結果記録を用いたが、記録に不備のあった試合については除外し、その結果Bリーグでは38試合が対象となり、本研究の対象とした試合は合計66試合であった。

2. データの収集

試合時間帯の単位については10分と定め、前半試合開始から10分までを1区分とし、以降10分ずつの時間帯を8つ設定し、これらの時間帯の得点を記録した。なお、本研究ではロスタイムについては前半、後半ともに30分以降の得点として設定した。

3. 分析方法

勝ちチームと負けチームの時間帯別得点の比較は、勝敗と時間帯別得点を要因とした2要因分散分析を行った。またAリーグとBリーグの時間帯別得点の比較は、リーグ間 (競技レベル) と時間帯別得点を要因とした2要因分散分析を行った。いずれも交互作用が認められなかった場合には、多重比較検定を行った。有意水準はいずれの検定も5%とした。

【結果と考察】

1. 時間帯別得点と勝敗について

勝ちチームと負けチームの時間帯別得点について比較を行った結果、交互作用は認められず、勝敗別および時間帯別得点ともに有意な主効果が認められた ($p < 0.01$)。時間帯別得点については前半0分～と後半30分以降、前半10分～と後半30分以降、後半10分～と後半30分以降で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、後半0分～と後半30分以降との間に有意な差 ($p < 0.05$) が認められ、勝敗に関わらず後半30分以降の得点が高くなる傾向がみられた。しかし接戦となった試合 (20点差以内の試合) を対象に同様の分析を行ったところ、時間帯別得点に有意な差は認められなかった。

2. 時間帯別得点と競技レベルについて

AリーグとBリーグの時間帯別得点について比較を行った結果、リーグ間に有意な差は認められなかったが、20点差以内の試合を対象に同様の分析を行ったところ、リーグ別には有意な差は認められなかったが、後半10分～20分と後半30分以降で有意な差 ($p < 0.05$) が認められた。

【まとめ】

関西大学ラグビーリーグの得点傾向として、勝敗別やリーグ間には違いはみられなかったが、後半30分以降の得点が多い傾向となっていることが明らかになった。

【引用文献】

中川昭ほか (2005) ラグビーゲームにおける時間帯別得点に関する研究—勝敗との関連からの分析—, トレーニング科学, 17: 201-210.

女子大学生のラグビーフットボールに関する意識調査

ーラグビーワールドカップ 2019 日本大会がもたらしたものー

○寺田泰人（桜花学園大学） 岡本昌也（愛知工業大学） 高田正義（愛知学院大学）
早坂一成（名古屋学院大学） 梶山俊仁（朝日大学） 大塚道太（名古屋経済大学）

キーワード：ラグビーワールドカップ 2019 日本大会、女子大学生、意識調査

【はじめに】

ラグビーワールドカップ2019 日本大会は日本中に熱狂と感動を与えた。日本代表チームを表す“One Team（ワンチーム）”は2019年の流行語大賞になるなど、まさにラグビー旋風が吹き荒れた。前回2015年大会前後に実施されたインターネット調査(株式会社インテージ)によると開催前後でW杯への認知率は高まったものの、20代の女性では大会前(8.6%)、大会後(17.7%)と男性および他の年代と比較して関心が高いとは言えない。そこで女子大学生を対象に2019 日本大会開催前後にアンケート調査を実施して、ラグビーに対する認知・関心を検討した。

【方法】

調査時期：2019年7月下旬および2020年1月下旬

調査対象：愛知県内の2つの女子大に通う女子大学生

7月 268名、1月 223名 合計 491名

調査内容：「ワールドカップの認知・関心」および「ラグビーの知識」に関する質問には二項目選択式、「ラグビーに対するイメージ」に関する質問には5件法にて調査を実施した。

【結果と考察】

1. ラグビーワールドカップに関する認知・関心について

ラグビーワールドカップの存在について、7月の調査では59.0%が知っており、その45.1%が前回のイングランド大会から知ったと回答している。しかし2019 日本大会についての認知率は48.5%と半数以下であり、さらにTV観戦の予定ありと回答したのは12.3%、スタジアム観戦0.4%だった。世紀の番狂わせと言われた南アフリカ戦の勝利や五郎丸効果によるラグビー人気が一過性のものであったことを表している。一方1月の調査で

は、認知率は64.1%、TV観戦経験が51.1%、そして62.3%がラグビーに関心を持つようになったと回答している。日本代表の決勝トーナメント進出はもちろん大会直前のPRや大会後の日本代表メンバーのメディア露出度などが大きく影響したと言えよう。

2. ラグビーの知識について

ラグビーワールドカップ開催の前後でラグビーに関する知識の変化については表1のとおりである。

表1 ラグビーに関する知識の変化

	開催前（7月）	開催後（1月）
プレイヤー数	7.5%	9.9%
ポジション名	11.2%	17.9%
ルール	39.6%	55.2%
トップリーグ	6.3%	9.9%
オリンピック	53.7%	51.1%

ルールの理解にはTV中継による解説や大会後のTV番組などが大きく影響したことが窺える。またラグビーがオリンピック種目であることは比較的周知されていることが明らかとなった。

3. ラグビーに対するイメージについて

ラグビーワールドカップ開催前後でのラグビーに対するイメージの変化については、他のスポーツとの面白さの比較では、開催後の調査において野球、サッカーなど他のスポーツより面白いとの回答がいずれも統計的に有意であること ($p < .05$) が認められた。さらにラグビーは「楽しい」、「激しい」、「特別なスキルを必要とする」、「ルールが複雑」、「今後人気スポーツになる」などのいずれの項目においても開催後の方が統計的に有意であること ($p < .01$) が認められた。

ラグビーフットボール選手の身体組成と臨床検査値に関する研究

○東出珠美(京都女子大学)、竹田実来(京都女子大学)、馬場満(大阪国際大学)、

石指宏通(奈良県立医科大学)、米浪直子(京都女子大学)

キーワード：身体組成、内臓脂肪、インスリン抵抗性、臨床検査値

1. 目的

ラグビー選手は体づくりとして体重の増加が求められるが、体重増加に伴う体脂肪の増加は競技力の低下や疾病の原因となり、特に内臓脂肪の蓄積や脂肪肝はインスリン抵抗性を引き起こす。インスリンは筋肉や肝臓での糖の取り込みや運動後の筋肉合成を促進するホルモンであり、インスリン抵抗性が生じると、組織でのインスリンの感受性が低下するといわれている。本研究では、若年男性ラグビー選手の内臓脂肪面積(VFA)、血液検査値から健康リスクを評価し、身体コンディションを改善するために、大学生および社会人ラグビー選手の栄養アセスメントを行った。

2. 方法

社会人ラグビーチーム(M チーム 36 名、24±4 歳)と大学生ラグビーチーム(O チーム 85 名、20±2 歳)の選手 121 名に身体組成測定、VFA と腹囲の測定、血液検査、食事調査および食習慣・生活習慣調査を行った。

また 5 年間の測定データ(258 名、M チーム 58 名、O チーム 200 名)を用いて、ROC 曲線からインスリン抵抗性の指標である HOMA-IR による TG、ALT、VFA、腹囲のカットオフ値を求めた。

3. 結果

トレーニング期である 5 月と試合期である 11 月の身体組成の比較では、O チームにおいて体重の変化はみられなかったが、体脂肪率が増加し、筋肉量が減少した。M チームについては、体重、体脂肪率、筋肉量に変化はみられなかった。

横断研究で求めたカットオフ値は TG(106mg/dl)、

ALT(26U/L)、VFA(83cm²)、腹囲(85cm)であった。

		単位	値
本研究の カットオフ値	TG	mg/dl	106
	ALT	U/L	26
	VFA	cm ²	83
	腹囲	cm	85
臨床検査の 基準値	TG	mg/dl	50-149
	ALT	U/L	5-40
	VFA	cm ²	<100
	腹囲	cm	<85

4. 考察

トレーニング期から試合期にかけて、筋肉量が減少し、体脂肪率が増加したのは、ウエイトトレーニングの不足や、食事の内容および食事摂取のタイミングに問題がある可能性が考えられる。

本研究のカットオフ値は、臨床検査基準値よりも少ない値となった。インスリン抵抗性は代謝・循環器疾患の前段階的な状態であるが、インスリン抵抗性が生じると運動後の筋肉合成が効率的に行うことができなくなり、筋肉の増量などに大きなデメリットとなることが考えられる。

5. 結論

ラグビー選手においては体重増加が求められるが、内臓脂肪が蓄積することによりインスリン抵抗性が生じる可能性がある。選手にはトレーニング量やポジションに合わせた栄養管理・指導が必要であり、体づくりの評価を行う上で、体重の増減だけでなく身体組成と臨床検査値に着目することが重要である。